

2017.08.05 書評会：光岡寿郎『変貌するミュージアムコミュニケーション：来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』を読む @東京大学本郷キャンパス福武ホール

社会・文化的状況に自覚的な「学習」の理解に向けて

杉山昂平（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

ksugiyama@g.ecc.u-tokyo.ac.jp <http://www.ksugiyama.com/>

評者のバックグラウンド

- 教育工学・学習科学 > インフォーマル学習 > 大人の趣味を支える学習環境の研究
- 「成人の趣味における興味の深まりと学習環境の関係——アマチュア・オーケストラ団員への回顧的インタビュー調査から——」を『日本教育工学会論文誌』へ投稿中



発表の概要

- 『変貌するミュージアムコミュニケーション：来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』（以下、「本書」と記載）において、「学習」はどのような位置づけを与えられているのかを整理
- その「学習」の位置づけに対する質問を、学習に関する社会・文化的アプローチへの著者の評価を問うという形で提示
- その上で、ミュージアムにおける「学習」を研究することにも良さはあり、それを「教育」という文脈に回収されずに、ミュージアムコミュニケーション概念と協力しながら行っていくことを提案

本書における「学習」の位置づけ

本書の研究目的

- ミュージアムコミュニケーションを記述するための方法論的な枠組みの検討
 - a) 既存のミュージアムを取り巻く言説の布置のなかで、「コミュニケーション」概念がいかなる意味を担ってきたのかを歴史的な観点から検討
 - b) 現代のミュージアムにおいて、来館者との間で意味が生成していくことを記述し、分析することを可能にする、新たな方法論的枠組みの提案

問題の文脈

- 既存の来館者研究が理論的に教育学の影響が強く、基本的には来館者の「学習」行動のみを記述対象としてきた（研究目的 a に関係）
- しかし、現状のミュージアムを見るに、ミュージアムで生起するコミュニケーションを教育—娯楽の軸線で理解することには限界がある（研究目的 b に関係）

a) ミュージアムにおけるコミュニケーション概念の歴史と「学習」

表1 ミュージアムにおけるコミュニケーション概念の歴史（本書をもとに評者作成）

年代	コミュニケーションの捉え方
1920～1930年代	（前景化せず）
1950年代	視覚コミュニケーション（／線条的なコミュニケーション）
1950年代後半～1960年代	行動主義的な一方通行のコミュニケーション
1970年代	教育（education, instruction）と学習（learning）
1980年代	構成主義的な学習 ，能動的オーディエンス
1990年代～現在	双方向的コミュニケーション

1970年代の「学習」

- 社会教育施設としての役割を要請されるミュージアム

1965年：初等・中等教育法 → 芸術や、人種・ジェンダーによる差別解消のための教育

1970年：環境法 → アメリカの環境や生態系を理解するための教育

- 学習 (learning) は、教育 (education, instruction) や教授 (teaching) と同義

1980年代の「学習」

- 多重知能 (Multiple Intelligence) に応じて学習内容は異なる
- 相互作用型体験モデル：個人的コンテキスト、社会的コンテキスト、物理的コンテキスト
- 「学習」概念のもつ含意の拡大 (p. 187-189)

強み：それまでの教義の『知性』に基づいたテストでは高い得点を獲得できずコンプレックスを抱いていた子供たちに、テストで測定される能力だけが学習能力なのではなく、それ以外の長所を伸ばす可能性を与えた。さらにそのようなインフォーマルな「学び」を促す場としてミュージアムの重要性が認識され、それが来館者の増加に影響を与えている

弱み：「学び」概念の拡大によって実証研究の対象となる来館者の行動の幅を広げるといふアプローチは、常に「学び」と「学び」ではない行動の間の境界線を引き直していく作業自体は維持してしまうことになる。それは結果として、無自覚なままに、境界線の外部にある後者を研究の対象から除外してしまうという構造を再生産（時に補強）し続けてしまう

b) 方法としてのミュージアムコミュニケーションと学習

- 方法としてのミュージアムコミュニケーションは「学習」を所与のものとしな
- ミュージアムにおけるコミュニケーション——もしくはその理解のあり方——は、専門家によって予め「学習」や「消費」といったカテゴリーで与えられるものではな

い。むしろ、同時代の社会的条件、メディア・テクノロジーの特性、そして対象を記述するうえで手に入る知識（scholarship）の相互関係を通じて形成されてきたものであり、私たちが問い続けることを前提に了解されるべきものである（p. 312）

- 「ミュージアムコミュニケーション」とは、「学習」, 「観賞」, 「消費」のような所与のカテゴリーを否定し、それらに置き換わるための概念などではない。むしろ、そのように理解されてしまう環境そのものが常に変化していることを認識するための方法なのである（p. 312）

評者から本書への質問——社会・文化的アプローチの評価？

学習に関する社会・文化的アプローチについて、著者はどんな評価を下すのか？

2010 年前後までを対象とした本書ではぎりぎり触れられていませんが、1990 年代以降の学習研究の動向として「社会・文化的アプローチ」があり、ミュージアムにおける学習研究においても導入されているようです（*1）。本書では、「学習」概念を用いることは「学習である／学習でない」行為を無自覚に区別し続けてしまうこと、それに対して「ミュージアムコミュニケーション」概念を用いることによって、そうしたカテゴリーを所与のものとしてせず、ミュージアムという環境と、そこでの人々の行為と意味の生成に照準できるという主張がなされています。しかし、評者は「社会・文化的アプローチ」はまさにそうした目標のもとに登場した研究動向だと考えます。「ミュージアムコミュニケーション」概念と同様の問題意識をもっている「社会・文化的アプローチ」について、[Q1] 仮に本書において社会・文化的アプローチが扱われた場合、著者はどのような評価を下すのだろうか、という点についてお聞きしたいと思います。

*1 「学習研究の歴史は、行動主義、構成主義、そして社会文化的アプローチという 3 つのパラダイムの展開によって記述されるが、ある意味ではミュージアムにおける学習研究の歴史もこれに対応している」（Crowley et al. 2014）。学習科学において社会・文化的アプローチが盛んになったのは 1990 年代であり（Nathan & Sawyer 2014）、ミュージアム研究では Kevin Crowley や Gaea Leinhardt らによって 2000 年代初頭から導入されているようである（e.g. Leinhardt et al. 2003）（*2）。ただし、『キュレーター』誌において sociocultural という語を明示した論文が登場するのは 2010 年代以降なので、本書の歴史記

述に登場しないのはやむを得ない

* 2 本書では、Leinhardt & Knutson (2004) が「認知心理学を理論的背景に、定性的なデータを積み重ねて来館者の経験の厚みを明らかにしていく手法」(p. 189) として注に言及されていますが、評者は注目されるべき理論的な意味があると考えます。

社会・文化的アプローチとは何か？

- ソビエトの心理学者ヴィゴツキーの理論を継承し、人々の実践が人工物や他者に媒介され実現していることに着目する学習科学の研究伝統。学習を「人が実践に参加する形態の変化」や「それにもなうアイデンティティの変化」として観察することで、状況に埋め込まれたものとしての学習がいかにして起きるのかを分析しようとする (石黒 2004, Lave & Wenger 1991, Nathan & Sawyer 2014)。

どんな研究を行うことができるのか？

- 教育的な目標を前提に置かず、人々の実践への参加の仕方がどのように変化していくのか、それが人々にとってどのような意味があるのか、を明らかにする研究

Azevedo (2011): 趣味としてのモデルロケットリーに関する 3 年にわたるエスノグラフィー研究。同じモデルロケットリーという趣味の内部でも、実践者の興味によって「高パワーのロケットをつくる」「チープでへんてこなロケットをつくる」といった異なる実践の筋道が存在することを示す

Lave (1988): 学校の教科においてテストで測られる「計算能力」と、スーパーの買い物のような日常生活の実践のなかで発揮される「計算能力」のズレから、学校や実験室といった状況の特殊性を指摘

- 実践への参加の維持や変化が、どのような物質的リソースによって支えられているのか、を明らかにする研究

Azevedo (2013): 趣味としてのアマチュア天文学に関する 3 年間のエスノグラフィー研究。アマチュア天文学実践は、星座カタログや天文雑誌によって天体観測の長期的・

短期的な目標が構造化されたり、観測スポットにおいて実践者どうしの情報交換がなされたりすることなどによって支えられていた

- 研究者があらかじめ「学習である／学習でない」を区別するのではなく、実践者当人たち（個人／共同体）にとって何が意味のある変化なのか、その変化はいかなる環境に媒介されて可能になるのか、を考えることができる
- もちろん社会・文化的アプローチ自体が「メディアコンプレックス」のような観点を提示することはない。しかし、例えば Leinhardt et al. (2003)が学習を「会話の精緻化」と定義してミュージアムにおける家族の会話を研究しているように、ミュージアムという対象を社会・文化的アプローチによって観察することで、メディア・テクノロジーに媒介されてコミュニケーションがどのように行われているのか、その状況においてどのようなコミュニケーションが良いものとされているのか、といった研究は可能である。それゆえ、「学習」の分野も本書が提起した問題に応えていくポテンシャルを秘めている、と評者は考えます。

ただし、

- 理論的に可能性を秘めていることと、それが研究において実現されることは別問題、という点がキモだと思っています。というのも、学習科学の場合、学習を研究しようとする人のほとんどが教育的な関心を持っているため、理論的には可能であっても「学習である／学習でない」といった区別自体を問題化する研究はあまりなされないからです。そうすると、たとえ社会・文化的アプローチを採用していても、状況自体を問い直すよりも「ミュージアムで科学的知識は獲得されたか」というような研究ばかりになります
- それゆえ、教育的な関心をもっていない人が——「社会」や「メディア」を理解するために——学習を研究する、という状況が生み出されると良いなと思っています。今回の発表で「社会・文化的アプローチ」と「方法としてのメディアコミュニケーション」の類似性を指摘したのも、メディア論と協力することで、「教育」を前提にしない「学習」研究が登場していくと良いな、それはミュージアムという場では可能なんじゃないか、と考えたからでした。
- この点に関して補足的に気になるのが、[Q2] 代表的なメディア研究者でありながら、シ

ルバーストーンのミュージアム論がほとんど注目されてこなかったのはなぜか，という点です。せっかく有望な理論や概念が存在していても，それを用いた実証研究が展開しない限りは「教育」によって回収され続ける面は大きいと思うので。

参考文献

- Azevedo, F. S. (2011) Lines of practice: A practice-centered theory of interest relationships. *Cognition and Instruction*, 29(2): 147-184
- Azevedo, F. S. (2013) The tailored practice of hobbies and its implication for the design on interest-driven learning environments. *Journal of the Learning Sciences*, 22(3): 462-510
- Crowley, K., Pierroux, P., Knutson, K. (2014) Informal learning in museums. In Sawyer, K. (ed.) *The Cambridge Handbook of Learning Sciences*, Second edition. New York: Cambridge University Press, pp. 461-478 : 縣拓充, 岡田猛 (訳) (2016) ミュージアムにおけるインフォーマルな学習. 大島純, 森敏昭, 秋田喜代美, 白水始 (監訳) 学習科学ハンドブック 第二版 第2巻. 北大路書房, 185-198
- 石黒広昭 (2004) 学習活動の理解と変革に向けて——学習概念の社会文化的拡張. 石黒広昭 (編) 社会文化的アプローチの実際——学習活動の理解と変革のエスノグラフィー——. 北大路書房, pp. 2-32
- Lave, J. (1988) *Cognition in Practice: Mind, Mathematics and Culture in Everyday Life*. New York: Cambridge University Press. : 無藤隆, 山下清美, 中野茂, 中村美代子訳 (1995) 日常生活の認知行動——ひとは日常生活でいかに計算し, 実践するか. 新曜社
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press. : 佐伯胖訳 (1993) 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. 産業図書
- Leinhardt, G., Knutson, K., and Crowley, K. (2003) Museum learning collaborative redux. *Journal of Museum Education*, 28(1): 23-31

Nathan, M. and Sawyer, K. (2014) Foundations of the learning sciences. Sawyer, K. (ed.)
The Cambridge Handbook of Learning Sciences, Second edition. New York:
Cambridge University Press, pp. 21-43